

---

# 六式を使う臨界突破

うおう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

六式を使う臨界突破

### 【Nコード】

N3840X

### 【作者名】

うおう

### 【あらすじ】

不定期更新です。気長に見てください。

小説名を変えました。

## 紹介

数々のスキルがありながら「ただただ平凡に」と心に刻んでおり、いろいろなことが起きる学校へと入学をしようとする津久見巖維人つくみいわひとこの学校で様々なことが起こるが、彼は平凡を守り続けていた。が、新たな生徒会長によって、その平凡は崩されることになる。フラスコ計画？生徒会戦拳？そんな危なそうな物は、木っ端微塵にしておもう！  
という気持ちで書いていきます。

これは転生モノですので苦手な人は、見ないほうが良いです。

神様は有能ではない

「ごめんなさい！！ごめんなさい！！」

「許すか！この無能神！！」

俺は今白っぽい服を着た無能神を罵倒している。

なぜかと言うと、こいつが俺のことを殺したからだ。

こいつが担当している、書類のミスで俺は死んでしまった。

そしてこいつは、上司からの叱責を受け左遷されそして神を辞め「ストップ！！！」

「なんだよ、無能神。」

「なんだよじゃねーよ！！何変なこと言っただ！！俺はまだ左遷されてない！！！！」

「自覚してないだけかな。」

「ひでーよ、こいついったいなんだよ・・・」

「で、俺はどうなるんだよ？」

「お前を、どこかの世界に飛ばす。」

「喰らうぞ、ゴラア（黒笑）」

変なこと言ってきたから脅してみたら警護使ってきた。

「嘘です。ごめんなさい!!」

「で、どうなるんだ??」

「えゝ私としてましてはどこかの世界に転生をして頂きたいのですが……」

「どこの世界だ。」

「めだかボックスの世界なんですが……」

「却下」

「何ですか!!」

「理由は三つある。一つは危険性があるからだ。あんな死亡フラグが立ちまわるとこなんかにには行きたくない。二つは俺はバトル物には興味がない。どちらかと言えば俺は推理物の方が好きだ。三つはなんで俺が自分を殺した奴のいうことを聞かなくてはならないんだ。俺が行くところは俺が決める。」

「えゝ真に申し訳ないのですが、選択肢はありません。」

「なぜだ」

「だってめだかボックスの世界が私の管轄なんです。お願いします、どうか譲歩を……」

と言つて、土下座してきた。

「あゝもう、いい、分かったよ、行けばいいんだろ。」

「ありがとうございます！！ありがとうございます！！」

「鬱陶しいからさっさとしやがれ！！！！」

「はいっ分かりました！！それでは何か能力はいりますか。」

「ンじゃここで修行させてくれ。」

「分かりましたけどなぜ???」

「武を極めなければ修行あるのみ、昔爺が言っていた。」

「それでは別の空間に送るので、そこで修行してください。」

「分かった」

「それでは……阿武羅型武羅！！！！！！！！」

パッ



続  
く

修行とはただただ厳しい物（前書き）

もう一つの作品も暇があったら見てください。

## 修行とはただただ厳しい物

「ふう、やっと修行が終わった。あいつの所にでもいくか・・・」

え？なんで修行のシーン書かないのかって？　書く暇があるなら続きを書くb y t o u

約3000年ほかの世界の武術、技術、仙術を学び、極めて来た。修行の間、確実に1000000000回は死んだと思う。

なぜなら、師匠が某海賊漫画の主人公の爺だったり、鳩の腹話術師だったり、あと暇つぶしでやってきた天照や、創造神、閻魔とかだったり、まあ結構きたわけだ。

そのおかげで俺は、武術に関しては、六式を極めて、改良して一つ増やして、七式使いになった。あと覇気も三色まんべなく極めた。見聞色に関しては、集中すれば未来まで見えるようになった。武装色は打ち出せるようになった。あと気を使えるようになった。まあカメハメ波は打てないが、身体能力の強化には使えた。あと武空術も。ついでに心月流武術も習得した。技術面では鍊金術が習得した。一応真理を見たから鍊成陣なしで鍊金術できるようになった。対価は右ストレートを喰らわしたら真理の扉開いてもらった。勉強は大変だった。あと視線誘導ミスティレクシオンを習得した。仙術を習得したら不老になった。

まあそんぐらいしか習得できなかった。

「おい、きてやったぞゴラア!!」

「ヒヤア分かりましたすぐに転生を・・・」待て」マダナニカ・・・」

「あと追加で、俺の体をサイヤ人にしてくれ、尻尾なしであと俺の  
武術や技術を異常に<sup>アブノーマル</sup>してくれ。」

「それだとコピーされますけど・・・」

「その対策として異常<sup>アブノーマル</sup>寄せ。」

「分かりましたではポチットな」

ガコン!!

「お前覚えてろ。」

落ちた

## 設定

名前 つくみわいと  
津久見巖維人

三年十三組所属 オーバーフロー  
臨界突破

身長185?

性格マイペース

仕事はちゃんとやるタイプ 動物に懐かれる。

好物 お茶

嫌いな物 意見がコロコロ変わるやつ

オーバーフロー  
臨界突破

キル・セブン  
暗殺の七式七式が使える。

デュアル・デュエル  
雌雄の決闘覇氣が使える。

マインド・マスター  
聖心集中氣、仙術が使える。

ミス・デレクション  
死線誘導相手の攻撃やスキルを誘導し当たらなくなる。

サイヤ・ボディ  
金剛超人サイヤ人の体

サイエンス・クリエイター  
科学的創造者錬金術が使える

ミスター・モノポリ  
独裁独占自分のスキルをコピーや無かったこと、交換、譲渡ができなくなる

説明 六式 指銃しがん指圧？が飛ばせて、威力が戦艦をも貫く。

剃そるルツチの10倍の速さ。

嵐脚らんぎやく威力は海を割り、1？先まで届く。

紙絵かみえあんまり使わないから、ルツチ程度。

鉄塊てつかいダイヤモンドを超える硬さ。

月歩げっぽう一発で数100mは飛ぶ。

覇気 見聞色 相手の心と数秒先が見える。あと集中すれば未来も見える。

武装色 纏った状態での最大の一撃は、隕石をも粉砕する。

気 超回復と治癒能力しか使えない。

仙術 不老長寿で、酸素など生きるために必要なものがないとも生きていける。

サイヤ人の体 尻尾がないのに、四段階まで変身ができる。自然回復が半端ない。

超人1 碧眼になり、戦闘能力と身体能力が5倍になる。

超人2 金髪碧眼になり、戦闘能力と身体能力が8倍になる。

超人3 金髪碧眼で長髪になり、戦闘能力と身体能力が10倍になる。

超人4 黒髪隻眼になり、朱いオーラを纏い、戦闘能力と身体能力が20倍になる。

錬金術 錬成陣無しで、できて主に鋼と焰と分解を使う。

## 設定（後書き）

ネーミングセンスがないのでこれより良いスキル名があったら教えてください。

知らない天井だ、とは言わない

やあ、みなさんごきげんよう、津久見巖維人<sup>つくみいわいと</sup>だ。

今は部屋に居る。机などを漁ったら、手紙が出てきた。その手紙にはこう書かれていた。

”チヨリース！！！！転生おめでとう！！！！この家は君のために用意した部屋だぜ！！！！この家に地下にはすんげえ広い修行場と、精神と時の部屋があるんだぜ！！！！金銭面についても心配ゴム用！！！！机の上にある財布の中には常に20万入っているんだぜ！！！！！！あと銀行にも莫大な金を預けているんだぜ！！！！あと今の年齢は15歳！！球磨川の一つ上の先輩なんだぜ！！箱舟中学に転校という形で入るからな！！！！明日から登校だからちゃんと準備しておけよ！！！！俺との連絡については、ぼっけに入っている、スマートフォンを使ってくれ！！説明は終わりだ！！！！あばよ！！！！！！！！！！

テンション上がり過ぎて、とてもうざい。

携帯でメール打っておこう。

”うざい”

これでいいな。

確認したんだが、財布の中には20万きっかり入っていた。

預金も見たんだが、通帳が7個あって、どれも10桁ぐらい入っていた。

余裕で二ト生活できんじゃねえか。する気ないけど。

ンじゃ、修行場にも行きますかな・・・

.....

着いたぜ、修行場に。

本当にだだっ広いな。ここから向こうの端まで何mあんだろっ。

そして硬いな。俺のパンチでもヒビがはいんねえ。

精神と時の部屋は、隣にあった。

中はほとんど一緒だった。

それでは一眠りでもしに行こうかな。

[illegible]

眠ろうとしてふと気が付いたんだが、容姿が変わっていた。

どんな容姿になったのかというと、某海賊漫画の海賊王の息子の容姿で、そばかすが無かった。

無論、背中に白髭のマークも、傷跡は無い。

まあ別にどうでもいいと思ひ俺は意識を手放した……

[illegible]

入学式にイベントが起こるとは限らない(前書き)

設定が痛くて申し訳ありません。

## 入学式にイベントが起こるとは限らない

ナマステ！この言葉の意味は分かるかな？

まあ冗談はさておき、津久見巖維人<sup>つくみいわひと</sup>だ。

今は入学式の途中だ。言っておくが俺は三年生だ。

今年の一年生は変な奴が多い。（俺も人のこと言える立場ではないが）

特にあの団子、団子はないと思う。

脇で男が何かしているが、あいつ等はカップルなのだろうか。

もしもカップルだったら、面白いのに。あいつ等まったく釣り合っていないからな。

さあ、こんなことをしているうちに入学式は、終わった。

俺はこれから、転入されるクラスに行く。

楽しみだ、と言えは嘘になるが（笑）

………キングクリムゾンとは言いたくない………

・・・・・・・・・・・・・・・・

教師「おい、入っていいぞ。」

そう言われ俺は、クラスに入った。

教師「今日からこのクラスの一員となる津久見巖維人君だ。自己紹介を頼む。」

俺は教師にそう言われ、黒板に名前を書いた。

俺「津久見巖維人だ。たった一年だが宜しく。」

男m b「なんか良いやつっぽいな。」

男m b「待て、球磨川の例があるだろ。」

男m b「そうだな、あいつ見た目は普通なのに、すごく気持ち悪いらな。」

男m b「それではあいつに球磨川のことを、教えてやろう。」

男m b「そうだな、そうした方がいい。」

男m b「前に知らずに接した転入生が、精神崩壊を起こして引きこもりになった。という逸話があるからな。」

勉 m b 「我々の受験の妨げにならねば良いのだが・・・」

勉 m b 「我々は有名私立高校に入学せねばならないのだ!!」

勉 m b 「今は入学時だが、大事な時期でことを起こされては・・・  
問題  
」

勉 m b 「受験の妨げになるな。」

勉 m b 「そうならないことを祈るべきだな。」

女 m b 「転入生、けっこう格好良くない？」

女 m b 「そう？」

女 m b 「彼女いるのかな？」

女 m b 「もしかして告るの？」

女 m b 「ちょっと、疑問に思っただけ。」

女 m b 「ふん」

変 m b 「うほっ!! いい男!!」

変 m b 「ノンケか？それとも!!」

変mb「あゝや 神の権限により、このコメントを削除した」

へ 神々の権限によりこの者たちの存在を削除する

各自思い思いの意見を出している。

途中変なことが、聞こえたが気のせいだろうか？

これだけで、20分ぐらい時間が過ぎている。

担任の教師も私語を慎めと言っているがまったく効果がない。

教師がとつても不憫に見える。

このクラスは学級崩壊でもしているのだろうか？

俺が前世通っていた学校は、こんなことしていたら普通に殴られていたぞ？

おっと、ようやく寝ていた学級委員長が（寝ている時点で可笑しいが）みんなを制し始めた。

そこでようやく、みんなが静かになる。

何なんだこの差は？

教師の言葉には耳も貸さないのだが、学級委員長が言つとすぐさま従う。

これは、教師が無能なのか、学級委員長が凄まじく有能なのか。はたしてどっちなのだろうか。

さて授業も大分遅れてしまったし、席に行くか。

こうして俺の、とても有意義で無駄な中学校生活が始まるのであった。

エピソードっぽくない？



入学式にイベントが起こるとは限らない（後書き）

がんばって書いたのですが、これが限界に近いです。

このような駄文に付き合ってくれてありがとうございます。

なお、神の腰が低いのは作者の腰が低いからです。

破壊臣とかの、鉄パイプはどこから持ってきたのだろうか。（前書き）

勝負です。

破壊臣とかの、鉄パイプはどこから持ってきたのだろうか。

今俺は帰り際に金髪の不良に絡まれている。

たぶんこいつがみんなが言っていた、破壊臣はかいしんだな。

何故ならば、急に後ろから鉄パイプで頭狙ってきやがった。

まったく礼儀が微塵も感じられない奴だ。

言っておくが怪我はしていない。恐見武色カオス・カラーの、

見で見切ったからだ。

さてと、こう考え事をしていたら、奴さん痺れを切らして突っ込んできた。

こいつの攻撃は速さもあるし攻撃力も凄まじいが、当たらなければ意味がない。

俺はこいつの攻撃を雌雄デュアル・デュエルの決闘の、

見で見切り避け続けた。

そしてさらにこいつは、逆上して怒りにまかせて攻撃を仕掛けてきた。

だが怒りにまかせた攻撃は、見た方からは凄まじい攻撃だと思われるが実際はそれほどではない。

さらに攻撃が単調になり、返って攻撃の軌道が読みやすくなるからだ。

腕のいいやつは、滅多なことでは怒りや感情に身を任せて戦うことは無いと聞く。

その点でもこいつは半人前だな。

数分ぐらい避け続けていたら、さすがに破壊臣でも息は切れるか。<sup>はいしん</sup>

俺は息を切らさなかったよ。何故かって？俺は<sup>オーバーフロー</sup>臨界突破だからな。

今まで無言で戦っていたが、このままでいても埒が明かないと考えたのか向こうから声をかけてきた。

破壊臣「はあ、はあ、お前いったい何者なんだよ。（こいつノーマルじゃねえ！！異常か？）<sup>アフノーマル</sup>」

俺「お前こそ俺に何の用だ？」

破壊臣「うるせえ！！さつさとぶっ壊れろ！！！」

（こいついろいろス力しててム力つく！！ぶち壊してやる！

！-！）

俺「まあそんなにカツカすんなよ。髪の毛が抜けるぞ？」

破壊臣「なんだとゴラァ！！！！！！！！（ぶち殺す！！！！！！！！）」

破壊臣はかいしんは俺の挑発に乗り、ブチ切れて突っかかってきた。

だがそれを俺はいとも簡単によけ、背中に蹴りを一発喰らわせた。

とても見切るのが楽だったよ。あれを表すならイノシシだな。

破壊臣「グハッ！ぐっなかなかやるじゃねえか。

（くそっ！なんだあの重い一撃は？！あと一撃でもはいつたら・・・）」

俺「大丈夫か？少し力を入れ過ぎた。（こいつなかなか丈夫だな。だけど次は耐えられるかな？）」

破壊臣「くっ！嘗めんじゃねーよ！！！！！」

俺「吠えている。破壊臣はかいしんさんよう？」

破壊臣「嘗めんじゃねえって言っただろうが！！！」

とそう言い破壊臣は自暴自棄になり、俺に向かって突っ込んできた。

しかしその時、とある部外者が声をかけた。

???「『だめだよ、高貴ちゃん。先輩には敬意を払って毒でも盛ればいいのさ。』」

俺「誰だお前？」

破壊臣「球磨川さんっ！！！！！」

球磨川「『こんにちは、誰だか分からないモブキアラのような容姿をしていて、』『暑苦しい友情や感動を感じる漫画の咬ませ犬のような雰囲気醸し出している先輩（笑）。』」

『今日は、僕が命令をして先日転校してきたばかりの先輩（笑）をぶち壊して来て』『と命令したのは良いものをあんまり帰ってくるのが遅いから、』『実はアッチ系の人の先輩が高貴ちゃんにあんなことやこんなことをしているのではないかと心配になって来てみました。』

『まあ実際のところはあんまり大したことがなくて本当に良かったです。』

『大丈夫だったかい高貴ちゃん。』

『本当にアッチ系の人だったら、僕も危ないところでした。』

『そういえば僕の自己紹介をしていなかったの、今させて頂きます。』

『僕の名前は球磨川<sup>くまがわみそぎ</sup>楔です。』『二年生で得意なことは、人の精神<sup>こころ</sup>を壊すことで、』『好きなことは嫌いな奴をジワジワと殺すことです。』

『そして将来の夢はエリート<sup>アフノーマル</sup>を抹殺することです。』  
『どうかよろしくお願いします。』

俺「それでは俺も自己紹介を。俺の名前は津久見<sup>つくみわい</sup>巖維人だ。三年生でアッチ系の人ではない。得意なことは修行、好きなことは睡眠。将来の夢は未定だ。宜しく。」

球磨川「『ほら高貴ちゃんも、どうせ自己紹介していないんでしょ。』」

破壊臣「ちつ、分かりましたよ球磨川さん。俺は阿久根高貴。二年生。得意なことは好きなことは破壊。将来の夢はありとあらゆる物を破壊する。くたばれ！津久見！！」

俺「それで球磨川はなんで俺のことを阿久根にけしかけたんだ？」

球磨川「『それはですね』『なんとなくウザいから』『あと退屈していたし』『誰かの悲鳴が聞きたかったから』『ですかねぇ』」

阿久根「そういうことだ。分かったならさっさと俺にぶっ壊されろ！！」

俺「断る。俺もそろそろ家に帰りたいから、お前たちを倒してからいく。お前らは俺に敵意がないならさっさと失せろ。攻撃してきたら加減はしないぜ。」

阿久根「嘗めるのもいい加減にしろ！！球磨川さんは下がっていただきますい！！ここは俺が・・・」

球磨川「『いや少し待ってよ』『高貴ちゃん』『ここは逃げた方がいいよ』『この人はとても強そうだし』『逃げた方が得かもしれないよ？』」

阿久根「しかしこいつは・・・『僕のいうことが聞けないの？』」  
・・・分かりました球磨川さん。」

球磨川「『そういうことなので』『僕たちはさっさとどこかに失せますので』『家に帰って少年ジャンプでも』『読んでいてください』『それではまた明日』」

俺「そうか、んじやな球磨川、阿久根。」

俺はそう言い背中を向けて帰ろうとした。

その時、

ガキ――ン!!!!!!!!!!!!

球磨川が俺の頭を鉄パイプで思いっきり殴った。

球磨川「『いやあ』『こんな簡単な』『だまし討ちに』『引つかかって』『くれるなんて』『過<sup>マイナス</sup>負荷の僕としては』『とてもありがたいです。』『でもこれも津久見先輩が悪いんです。』『たぶん津久見先輩は』『明日の朝あたりに』『僕たちが登校している最中に』『報復してくる可能性があったのですから』『これは僕たちの身を守るために』『行ったので』『僕は悪くない』」

球磨川の変な愚痴を聞きつつ俺は立ち上がった。

俺「お前の言い分も間違いではないと思うが少し強引すぎやしないか？」

俺がそう言つと二人はとても驚いた。

阿久根「嘘だろっつ！・・・（あれは確実に決まっていた。なぜ倒れない。俺でも喰らったらただじゃすまないのに・・・まさか球磨川さんと同じ・・・！！）」

球磨川「『へえ』『結構丈夫なんですな』（こいつはいつたいたいなんなんだ？見たところ異常でも、過<sup>マイナス</sup>負荷でもないしもしかしたらそれ

以上の存在・・・???)

俺「さてと一発もらったし、二人にも一発お返しをしますか。」

球磨川と阿久根「『(や、やばい・・・!!!!!!) させるか!!!!!!』

」

阿久根は鉄パイプを投げ、球磨川はデカイ螺子を複数投げつけてきた。

俺はそれを暗殺<sup>キル・セブン</sup>の七式の、

紙絵<sup>かみえ</sup>を使い避け、

俺「暗殺<sup>キル・セブン</sup>の七式!

指銃<sup>しがん</sup>奥義!!!

グングニル  
神の槍!!!!!!」

全力の指銃<sup>デュアル・デュエル</sup>が雌雄の決闘の、

武 を纏い、高速回転をして、音速の五倍の速さで飛んでいき、  
球磨川

と阿久根は直撃は防いだが結構吹っ飛んでしまった。

さて帰るか。



破壊臣とかの、鉄パイプはどこから持ってきたのだろうか。（後書き）

阿久根のキアラはこれで良いと思いますか。  
チンピラっぽくなりましたが。

オリ技説明

指銃奥義 グングニル 神の槍

指銃に武装色の覇気を纏い、高速回転を加え音速の五倍の速さで飛ばす奥義

夢を見れば新たな発見があるかも知れない（前書き）

スキルが増えます。

夢を見れば新たな発見があるかも知れない

俺は今学校に登校中だ。

昨日は球磨川と阿久根に絡まれてとても大変だった。

あいつ等は登校中に襲ってくる可能性があるから俺は、何時もより二時間早い、

六時ごろに登校した。

やはり登校中は誰一人会わずに学校に着いた。

教師もいなく結構暇だ。

こついう時には寝るに限る。

そう思い俺は即座に睡眠を開始した。

.....

「またお前か、今度は何の用だ。」

「それは暇だったからです。あと私の存在も皆さん忘れかけていると思いましたので。」

「お前もか、神はそんなに暇なのか？他にやることはないのか？」

「あなたを間違えて殺してしまったので、今は自宅謹慎中で、暇なんです。」

「あつそう、それじゃ楽しい楽しいお遊びにでもなるか？」

「全力で善処させて頂き「反対意見は認めないぞ」分かりました。やればいいんですよ、やれば！！」

「よしそれならば対人外用に開発した、奥義をブチ込むぞ。」

「え？ちよつと待つてください、なんて言いましたか。私神ですけど耐久力は人並みなので出来れば人用の技にしてください。お願い  
「反対意見は認めない」いや、ちよ、待って・・・！！！！」

「サイヤ・ボデイ  
金剛猿人！！！！」

あかきえんじん  
超人4！！！！！！

サイエンス・クリエイター  
科学的創造者！！！！

鋼 【金剛鉄鋼鋭爪】  
クリエイト 創造！！！！！！

デュアル・デュエル  
雌雄の決闘！！！！ 武 ！！！！

キル・セブン  
暗殺の七式！！！！

きゆうきよくしがん  
究極指銃！！！！！！！！

ロンギヌス・ゲングニル  
神々と魔王の宝槍！！！！！！」

現時点で最も破壊、貫通力、威力に優れている究極指銃きゆうつきよくしがんを神に向けて撃った。

「つぐつぐつぐつぐつぐつぐつあゝゝゝゝゝゝがあああああああ  
ああああああ……!……!……!……!」

神は変な叫び声を叫びながら消し飛んだ。

今は実に清々しい気分だ。

だがこの技は実に危ない。本当に人外のやつにしか使わない用によう。

そうこう言っている内に、光が集まってきて神が復活した。

「お前、ふざけんじゃねえぞ！！あれ俺以外が喰らってたら確実に消し飛んでいたぞ！！！」

あの威力は何なんだ？！！星をも壊す威力だったぞ！！！！もう少し加減しても良いんじゃないか！！

あれは神様も喰らったら不死身じゃなければ死んでいるぞ！！！！  
！お前、もう少し考えて使え！！！！」

「はっはっはっはっはっは、黙れ。あれはあれでまだ未完成の技だ。本当は撃った後科学的創造者の、焔サイエンス・クリエイターを使って爆破させる予定だったんだが、それではお前が不憫だと思ひ爆破は無しにしてやつ



[illegible]

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめ  
んなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんな  
さい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、  
ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめ  
んなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんな  
さい。」

「うるせえ！！！！！！！！！！！！！！、黙れ！！！！！！！！！！」

もはや異常のごとく謝り続ける神は、とてもうざい。

「はっ！分りました！！静かにします！！」

「分ければ良い。それではさっそく次の新技を……」

「それだけは勘弁してください……！お願いします……！！！」

「それじゃ何か寄越せ。異常でも過負荷でも臨界突破でも何でもい  
いから寄越せ。」

「分かりました。では三つとも差し上げますのでどうかこれ以上は・  
・・」

「分かったからさっさと超越せ。面白いスキルを頼む。」

「それでは、f 時 f j g d ふい j ン飛燕 h の意 f ン b d ふい n b d  
f ン b んぢじょ f d ンび r ン m k h 例日 d f ン簿のインほんふい n  
b d の f ン簿 d f b ン d ふお b h g じえ r g ン m ぼしえろ n b ふお  
いんべい r h j れ j 日俺ば位 h ン口委 g s j 日 s f の b ンふおイン

h 簿英 r h n 簿い f n d 細いば s j n 簿 b h j 氏 J 簿異 s h 日 s j  
g 補遺 r j g 保持イオ b じえ r b じよえ r 母音胃炎オン簿 r に J 語  
彙 J 護衛 r j 魏絵お r b レ所 J 越え r j j 越え r g 所英 J 芸後れ J  
下 r g れ h 魏エ口い h j 芸 G じえり h j 例王 s d f の簿位 h 日尾 h  
れ h g r h ぐえい d s h ぐえい t y v 野地 v 歩 d s h 簿 S n 簿異 j  
h 例魚簿 j b の絵 h を異 h w b オリ h 越え g j ヘリヘ r h れ g h j  
つれほいれろういおうい h を r ほいえうおい w 所 w h r ういっじえ  
ひ J n 簿位の意 f g 吠え r h b n O m w m 背 r 議論露 b のっうえ w  
p j n g w w じえおい g j を g h ういえ h g w n v ういふえういお  
v んうえい J 後 w g ひいりえ w j g w ポエゴ w J ポ絵 g j p ウエ J  
後 p w じえご J うえお J ポン簿 S に r w j 補助 f J ベ品 f r む r ネ  
イ g b 例冷え r j 補助い r h 下 r 兵ヘリ h 芸 h ゲ才位 h れ兵ヘポ h  
じえお j r r p じえ p r j ヘポ J 歩 j h ポ絵 J 冷え r h j ぽっへじ  
えおヘ j r ペ J ヘお J ヘ p j h ペ J 歩 j h t r p ヘ J ヘポ J ヘお j  
k h 手ポ J ビン b r m b l e w r j b 理 h b p 露 j h n ベお p r j n  
ロ p r j ヘじよほへ所ヘポヘ k ヘ p j w h j ろい h j t t 簿 w n 塩  
b f r r うえお 5 う j r h b m j 4 お J 3 h 9 J n p r j s n 9 0  
3 9 h 所 p j n ぽ k j h 3 9 0 う 5 y j 9 0 砲 9 0 3 5 y 6 0 5 3  
0 位 h 0 3 5 9 5 5 9 う 4 2 5 う y 9 4 9 0 2 9 6 う 2 9 う 6 9 う  
2 9 4 6 う 9 う 2 0 う 6 2 9 う 6

情報の処理終わりました。」

「あゝ頭が痛い。お前はいったい何をしたんだ？詳しく話せ。」

「アブノーマル マイナス オバーフロー」  
「異常と過負荷と臨界突破のスキルの情報を一気に頭の中に入れた  
だけです。なにか不具合はありますか？」

「特に無い。でお前はどんなスキルを俺に加えた？」

アフノーマルシンクロ・ファイリング

「異常は共鳴同調です。ON/OFF可。このスキルは仲間や友達など心を許した相手が近くにいると、その相手と自分の身体能力と戦闘能力が上がります。この増加量はその相手との絆が強ければ強いほど、共鳴する相手が多ければ多いほど増えます。さらに共鳴する相手がほかの相手との絆も関係して増加量が増えます。例えば共鳴する相手がエースとサボだとして、スキルを使うのがルフィだとするとこのスキルの増加量は飛躍的に上がります。なぜならばエースとサボとルフィは義兄弟の契りを交わしておりその絆はとても硬い物になっていくからです。つまりこのスキルは交友関係がとても広くないと全然使えませんが、広ければ広いほどこのスキルはとも役立ちます。」

「ほおう、それは凄いな。他のやつは何だ？」

マイナス

バヌウェイ・トーフ

「過負荷は理不尽な真実です。ON/OFF可。このスキルは真実を捻じ曲げることができます。例えば容疑人Aが人を殺した真実を、このスキルを使えば無かったことを真実にしたり、容疑人Bが殺した真実にすることができます。さらにこれは一度真実を捻じ曲げて違う真実にした後さらに真実を捻じ曲げて元に戻すことができます。あと嘘を真実に変えることは出来ません。」

マイナス

「球磨川の過負荷の強化版か。それで最後は？」

オーバーフロー

よこしまなるめ

「臨界突破は全テヲ見透カス邪眼です。このスキルは目の色が光をも吸い込むブラックホールのような黒になります。ON/OFF可です。このスキルを使うと目の色が黒になり、相手の動きがより遅く鮮明に見えるようになり、ある特殊能力が使えます。」

「俺の目はもともと黒だけどな。でその特殊能力とは何だ？」

「その特殊能力は時間と空間の狭間を行き来でき、違う空間や時間にでたり、相手を時間と空間の狭間の闇の中に引き込んだり、空間と時間を止めたりすることが出来ます。」

「それはもう神の領域じゃねーのか。でもお前そんなことできるのか？」

「いや実はこのことが全知全能の神とか天照大神にばれていて、貴方の転生ライフが神々の娯楽になり近々他の世界に行ってもらう可能性もあるので強いことには越したことがないと言われましたので・

・

「おいっ！！！そんな話俺は聞いてないぞ！！何とか「できません」  
・・・糞があつ！！！！！」

「ま、そんなに気を落とさずに元気に生きましょう。おまけにほかの神から貰ったあるスキルを上げますので気を落とさないで下さい。

」

「そのスキルってなんだよ。マシなのじゃ無かったらぶちのめすぞ。

」

「スキルは異常は天からの偽才です。アップノーマルギフ・ミィ・ポテンシャルこのスキルは自分のスキルの劣化したものを違う人にコピーして渡すスキルです。渡し方は相手の体に触ることです。もし気に入った普通ノーマルや特別スペシャルがいたらこのスキルを使ってスキルを上げてください。」

「そんな相手がいるのかねえ。おっそろそろ時間だ。あばよ！！」

「アデュー、あとほかの転生者も入れたのでくれぐれも注意を・・・

「あいつ最後に何言ってるのかが聞き取れないまま俺は目覚めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

現在の時刻は午前7時30分そろそろ誰かが学校に来ているはずだ、  
と思い俺は人を探した。

そしたら昨日入学式に来ていても特徴的だった、一年生がいた。  
そいつは俺のを見つけるところ言ってきた。

団子「おはよう、津久見三年生、良い朝だな。」

俺「自己紹介ぐらいしろ、あと敬語を使え団子。お前はなぜおれの  
名前を知っている。」

団子「これは失礼私は黒神めだか、一年生だ。貴方の名前はこの学  
校の名簿によって知った。モチロン全校生の名前と組番号を覚えた。

俺「（敬語使えよ・・・）ほう、それは凄いな。では改めて俺は津くみわいと  
久見巖維人。三年生で先日この学校に転校してきた。新参者同士宜  
しくな。」

俺はめだかと握手をした。

めだか「こちらこそ宜しく、津久見三年生。実は一つ質問があるの

だが・・・良いか？」

俺「俺に答えられる事なら、答えてやる。」

めだか「では、津久見巖維人お前は何だ。」

俺「俺は俺であり他の何物でもない。」

めだか「私はそのつもりで言ったのではなく、<sup>アフノーマル</sup>異常か、<sup>ノーマル</sup>普通のど  
つちだということで、分かったか。」

俺「それならば俺は、<sup>ノーマル</sup>普通でもなく<sup>スペシャル</sup>特別でもなく<sup>アフノーマル</sup>異常でもなく<sup>マイ</sup>過負  
<sup>ナス</sup>荷でもなく<sup>ノットイコール</sup>悪平等でもない。俺は<sup>ノーマル</sup>普通が<sup>ノーマル</sup>特別で<sup>オーバーフロー</sup>異常で過負荷で悪平  
等な修行を終えてできる、この世に一人の<sup>オーバーフロー</sup>臨界突破だ。」

めだか「?????!?!?!????」

俺「そういうことだ。んじやな。」

ギフ・ミー・ポテンシャル プレゼンツ  
天からの偽才、贈呈。

アブノーマルシンクロ・ファイリング  
異常、共鳴同調

夢を見れば新たな発見があるかも知れない（後書き）

## 説明

あかきえんじん  
超人4

朱いオーラは武装色の覇気と同じで纏うと、攻撃力と防御力が上がる。

## 鋼 【金剛鉄鋼鋭爪】

指につける武器。

形はRPGのモブの兵隊が持つてそうな槍の刃の部分。  
キャップのように指につけ指銃で飛ばす。

硬度は金剛石よりも固く、木のように軽い。  
一応鉄鋼も混じっている。

ロンギヌス・グングニル  
神々と魔王の宝槍

サイヤ・ボディ あかきえんじん  
金剛猿人の超人4を発動し、サイエンス・クリエイター 科学的創造者の鋼 デュアル・デュエル の力で作った【  
金剛鉄鋼鋭爪】が超人4の朱いオーラと雌雄の決闘の武 デュアル・デュエル を纏い、  
キル・セブン 暗殺の七式の指銃で撃つて、高速回転をしながら、距離が離れてい  
くにつれて威力が上がり、敵に喰らわせる。神の槍の数十倍の威力  
なので、喰らったら人外以外は、消し飛ぶ。  
グングニル

## 転生者との決闘（前書き）

オリキアラとバトルです

## 転生者との決闘

転生者「俺はお前の存在を認めねえ！！！！神に選ばれたのはこの俺だ！！！！」

俺「あっそ。（マジうざい）」

ハロータローオカモトタロー。

このネタ知ってる人はいるかな？

俺は今他の転生者に絡まれている。

あの神俺のいる世界に何部外者寄越してんだよ。

そしてこいつマジウザい。

とても熱血で、暑苦しい。

そしてナルシスト。

ウザいやつらの典型的なパターンだ。

こいつは俺と違って赤ん坊からのスタートだったらしい。

そして二歳ごろ病院で球磨川とか善吉とかめだかに遭って、めだかと善吉と友達になったらしい。



「

転生者「嘗めんな!!!今すぐにも殺してやる!!!」

俺「分かった分かった。だがここでは場所が悪い、違つとこでやるぞ。」

転生者「分かった。だけど今更逃げんじゃねーぞ!!!」

俺「もしもし。」

神「はい、何か御用ですか。」

俺「殺し合いをすることになった。お前のところの決闘場貸せ。」

神「分かりました。今から転送します。」

転生者「おい!!!なに長々と電話してんだ・・・」

ブウウウウン!!!!!!!!!!!!!!

・・・・・・

俺「到着~~~~~」

転生者「何処だここは!!!!!!いつの間にこんなところに!!!!!!」

俺「御託を並べないでさっさとかかってこい。それともなんだ？怖くなつたのか？？」

転生者「~~~~!!!!」なら、遠慮なくブチノメシテやる!!」

と言いきつは真つ向から突撃をしてきた。

無論そんなもの当たるわけがなく、華麗に避けそいつは闘技場の壁に突っ込んだ。

ドゴンと鈍い音をしてそいつが目を回しながら立っていた。

転生者「あたたたたた、チクショー！！次はこれだ、斬魄刀・天鎖斬月！！月牙天衝！！！！！！！！！！」

ズシャ――！！！！！！

そいつは某死神代行漫画の主人公が使っている、武器を何処から取出し黒い斬撃を放ってきた。

俺「死線誘導」

俺は臨界突破の死線誘導を使い、攻撃の軌道を剃らした。

このスキルは自分に害がある物の軌道を剃らすことが出来るスキルだ。

だがこれは意識して使うスキルなので、奇襲や罠などにはあまり効果がなく、常時使い続けることもできない

さらに剃<sup>アカセラ</sup>らすだけなので、一方通行のように反射はできない。

だが紙<sup>かみえ</sup>絵と組み合わせれば、ほとんどの攻撃が当たらないといっても過言ではない。

転生者「まだまだあー！ー！ー！！！！！！」

ブオン、ブオン、ブオン、ブオン、ブオン、ブオン、ブオン

あいつは黒っぽい気を纏いながら、刀で何度も切りつけてきた。

俺「あらよっとっ！」

ヒヨイ、ヒヨイ、ヒヨイ、ヒヨイ、ヒヨイ、ヒヨイ、ヒヨイ

だがそれを俺は紙<sup>かみえ</sup>絵で避けていく。

一応恐見武色<sup>カオスカラー</sup>の見で攻撃<sup>けんぶんしよくのはき</sup>を読んでいる。

転生者「ちっ！！斬魄刀・千本桜景嚴<sup>せんぼんざくらかげよし</sup>！！吠景<sup>ごうけい</sup>・千本桜景嚴<sup>せんぼんざくらかげよし</sup>！！！！！！」

ザザアアアアアアアアアアアアア

あいつの持っていた天鎖斬月が消え、代わりに刀身のない刀を出したと思ったら、背後から膨大な量の桜の花びらのような物が出てきて、俺を包み込むようになってきた。

俺「厄介<sup>ソル</sup>だな、剃<sup>ソル</sup>！」



サイエンス・クリエイター ほんのれんきんじゅつ

俺は科学的創造者の 焔の力を使い雪を爆発で吹き飛ばした。

サイエンス・クリエイター  
このスキル、科学的創造者は三種類のタイプがある。

はがねのれんきんじゅつ

一つは 鋼。これは鉄や鋳物などの金属系の元素を使いこなせる。

次が 焰。これは燃燒物・酸素を生成しそこに空氣中の塵を導火線代わりに利用して点火点からの火種を送り込む事で炎起こすことが出来る。

本来ならば発火布などで火を起こすことが必要だが、人外クラスの身体能力を持っている俺ならば発火布を使わずともフィンガースナップで簡単に火花を起こせる。

最後が分解。きずのれんぎんじゅつこれは相手の体や周囲の建物などの元素を分解すること出来る。

さらに俺は月歩と剃の複合技剃刀で相手に近づき、

俺「鉄塊拳法奥義！！雷神の宝鎚！！！！！！」

俺は鉄塊・金剛をした状態で雷に近い速さの蹴りを放った。

ドゴンッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

あいつは俺の蹴りをまともに喰らい、吹っ飛んで行って壁に激突し  
クレーターができた。

俺はズタボロになったあいつにこう言った。



俺「嵐脚奥義、断罪の大刀！！！！！！」

ズシャン！！！！

俺は断罪の大刀であいつを真つ二つにした。

俺「理不尽な真実。」

さらに俺はあいつがこの世界にいたという真実を、いない真実に変えた。

これで原作通り進むだろう。

あとはあの神にお仕置きをするだけだ。

## 転生者との決闘（後書き）

オリ技

ゲイ・ボルグ  
心の臓を喰らうもの

指銃奥義の中では牽制のために使うことが多い。

指銃を高速で30発撃つ。周囲からは一発しか撃ってないように見える。

撃てば30の鏃となって突き刺さり直接喰らったら30の棘となり破裂する

威力 一発が神の槍グングニルの五十分の一

射程 約800M

鉄塊奥義雷神の宝鎚トゥール・ハンマー

鉄塊・金剛を掛けた状態で雷に近い速さで蹴りを撃つ。

鉄塊奥義の中の数少ない攻撃技

あかきえんじん  
超人4の状態だと、雷を纏う。

威力 ロンギヌス・グングニル  
神々と魔王の宝槍の三分の二

嵐脚奥義断罪の大刀<sup>ガラティーン</sup>

とてつもない大きな斬撃で相手をぶった切る。

嵐脚奥義の中でも攻撃範囲が二番目に広い。

威力 某死神漫画の無月の二分の一

攻撃範囲 半径7？

この転生者は死神ではないので、無月などの攻撃は本物より格下なので喰らってもそんなにはダメージを与えられませんでした。

本物の一護や冬獅郎などと戦うと、五分も持ちません。そういう設定です。

## 逃走と電話と戦いの序章（前書き）

設定で霸王色の覇気を無しにしました。

# 逃走と電話と戦いの序章

善吉「おい！待ちやがれ～～～～！！！！」

球磨川「イケー高貴ちゃん!!」

阿久根「球磨川さんも自分で走ってください！」

めだか？「まてつくみさんねんせえええええええええええい  
！！！！！！」

俺「誰が待つか、こんちくしょう!!!」

ヘルプ！！！！ヘルプ！！！！ヘルプ！！！！

ヘルプ!!!

俺は今人吉善吉、球磨川楔、阿久根高貴、黒神めだか（乱神モード）に追いかけられている！！

何故か球磨川は自分で走らず、阿久根が肩車で運んでいる。

俺「ちよつと待てつて！！球磨川と阿久根は分かるが、なぜお前からまで？！！特に人吉善吉お前とは 初対面だろ！！！」

善吉「馴れ馴れしく俺の名を呼ぶな！！！！俺は知っているんだ……」



吹っ飛ばされた。Orz

.....

俺「クソツタレ、あいつなんであんなに力が有るんだ？」

今俺は自宅にいる。

俺「そーいやなんで理不尽な真実が通用しないんだ??」  
バヌウェイ・トーフ

(神にでも電話してみるか)

ブルルウルルルルルルル!!      ブルルウルルルルウルルルウ  
ウルル!!ガチャ!

神「はい、何かご用でしょうか?」

俺「お前から貰った過負荷効かないんだけど。」  
マイナス

神「当たり前ですよ、人から貰った物なんて完成が無ければ、最初  
スキル      ジ・エンド

から完全に使えるわけがないでしょうか。今回の場合転生者の存在はほとんど消されてますが、親しい友達や親族は消えなかったみたいです。まあ彼の場合親はいない設定になっていますので、効果がなかったのは友達のみとなったのでしょうか。」

俺「あつそ、じゃあいつらはなんで転生者が死んだことを知っているんだ??」

神『あいつです。『例の人』です。』

俺「あいつかよ、あの糞ババアなに余計なことしてんだよ。」

神『そういうことなんで、ほかに何かありますか?』

俺「俺は何をすればいい??」

神『いつそ黒神めだかを倒したらいいんじゃないですか??』

俺「まあそういう手段もあるがな、俺は他の安全な方法を使いたいんだ。」

神『じゃあ、他に何かいい手段でもありますか?無いならこの手段にしましょうよ。』

俺「それじゃほかに手段も思いつかないしそれにするか、だが後処<sup>そのき</sup>理は<sup>あく</sup>どうする??」

神『それは私の方で何とかしておきますので、さつさと黒神めだかを倒して来てください。』



## 逃走と電話と戦いの序章（後書き）

次回はテストが終わってからにします。

## 普通と特別と完全と負完全と悪平等 V S 臨界突破（前書き）

試験が終わって一喜一憂です。

ここからオリルートになります。

苦手な人は見ないことをお勧めします。

これ以上キアラ崩壊をするので、耐えられない人は見ないことをお勧めします。

最後にこんな駄文を見てくれてありがとうございます。

# 普通と特別と完全と負完全と悪平等 V S 臨界突破

場所 箱舟中 校庭

時刻 午前 零時零分

決闘者 何処にでもいる普通 ノーマル 人吉 善吉

保有スキル アブノーマル 双サイトシューティング 異常欲視力 安心院

アブノーマル ビル・デビル 異常恐れる悪魔 安心院

スペシャル 特別な破壊臣 阿久根 高貴

保有スキル マイナス シヴァ・ジュニア 過負荷破壊衝動 安心院

完全無欠で主人公な異常 アブノーマル 黒神 めだか

保有スキル アブノーマル エンド 異常完成

アブノーマル クロ・フーリンゲ 異常共鳴同調

少年ジャンプ好きで負完全な過負荷 マイナス 球磨川 楔

保有スキル マイナス 過負荷 ブック・メーカー 却本作り マイナス 過負荷 オイル・フイクション 大嘘憑き 安心院

.....

万能チートな悪平等 ノット・イコール 安心院なじみ

アブノーマル  
異常

保有スキル 7 9 3 2、 1 3 5 4、 4 1 5 2、 3 2 2 2 の

イナス  
負荷

4 9 2 5、 9 1 6 5、 2 6 1 1、 6 4 3 の過マ

今回は後方支援（スキルの貸し出し）のみ

.....

V S

オーバーフロー  
臨界突破の転生者 津久見巖維人

保有スキル

アブノーマルシンクロ・フーリング  
異常 共鳴同調  
マイナス 過負荷 理不尽な真実  
オーバーフロー 暗殺の七式  
臨界突破 デュアル・デュエル  
オーバーフロー 雌雄の決闘  
臨界突破 マインド・マスター  
オーバーフロー 聖心集中  
オーバーフロー ミス・デイレクション  
臨界突破 死線誘導  
オーバーフロー サイヤ・ボデイ  
臨界突破 金剛猿人  
オーバーフロー サイエンス・クリエイター  
臨界突破 科学的創造者  
オーバーフロー ミスター・モリボロ  
臨界突破 独裁独占  
オーバーフロー よこしまなるめ  
臨界突破 全テヲ見透力ス邪眼

俺は今箱船中の校庭にいる、時刻は午前零時零分まであと数分つてところだ。

俺はあいつらに挑戦状を送った。

内容は、○月?日、箱舟中校庭、午前零時零分。

俺は貴様らの挑戦を受ける。

恨みや因縁を断ち切りたければ来い。

気が済むまで相手をしてやる。

スキルを使っても構わん。

無いやつは借りても良い。

俺を楽しませろ。

津久見 巖維人

この手紙は、人吉善吉、黒神めだか、阿久根高貴、球磨川楔と、安心院なじみに送った。

安心院なじみは遭った時、即座に全テヲ見透カス邪眼で時間と空間の狭間の闇の中に封印した。

あいつはとんでもないチートだ。封じておいて損は無いだろう。

だがあいつは何らかのスキルを使って、あの闇の中から精神だけを出して他の奴らと接触をしている。

あいつらは、安心院なじみと手を組んでスキルを貰っている。

なぜ俺がこんなことを知っているのかというと、あの神が教えてくれたからだ。

当然スキルの情報もだ。

人吉善吉は異常を二つ。バラサイト・シーリシベル・デビル 欲視力と恐れる悪魔だ。

バラサイト・シーリシベル・デビル 欲視力と恐れる悪魔は、

おそらく安心院なじみが貸し出したものだと思う。

バラサイト・シーリング  
イビル・デビル 欲視力は知っているが、  
恐れる悪魔はどんなスキルかは分からないが、  
名前からして戦いに向いているスキルだと思う。

阿久根高貴は過負荷を一つ。シヴァ・ジュニア 破壊衝動だ。

このスキルは謎だ。たぶん破壊に関係しているのだと思う。

球磨川楔は原作通り過負荷をもらい大嘘憑きに変えた。オール・フィクション

たぶん球磨川には攻撃しても意味がないから倒すのは一番後にしよう。

黒神めだかはスキルを貰ってない。まあ必要無いか。

そうこうやっている内にあいつらが来た。

.....

午前零時零分

めだか改「来てやったぞ。津久見。」

俺「よう黒神、今日は楽しもう！」

善吉「ケツ！そう余裕ぶっているのも今のうちだけだ！」

阿久根「お前は俺がぶっ壊す！！！！！」

球磨川「『僕は暇つぶしに来た』」

俺「球磨川お前のは嘘だろう。」

めだか改「戦う前に津久見、なぜ殺した？」

俺「あいつが武器を取り出して、俺を殺す気で襲いかかった。だから殺した。『俺は悪くない』」

めだか改「つつつつつつくうつつつみいいいい！！！！！」

ドゴォーーーーーン！！！！！！！！！！

戦いの始まりだ・  
・  
・

**普通と特別と完全と負完全と悪平等 V S 臨界突破（後書き）**

もう一個あります。

## 普通と特別と異常と過負荷と悪平等 V S 臨界突破 続

めだかは殴り、

善吉は蹴り、

阿久根は金属バットを振るい、

球磨川は螺子を投げた。

巖維人はそれを片手で防ぎ、もう一つの手で反撃をした。

「指銃奥義、ゲイ・ボルグ心の臓を喰らうもの！」

三十もの鏃がめだか達に襲いかかる。が、めだかは避け、

善吉は蹴りで相殺し、

阿久根は金属バットで逸らし、

球磨川は喰らったが、瞬時に傷が無くなってしまふ。

巖維人はそれを見て、やはりな、と呟いた。

今度はめだかが反撃をしてきた。

めだかはパンチと蹴りの応酬を浴びせてきた。

巖維人はそれに向かい打つように殴りかかる。

ドゴン！！ガン！！！！ガキン！！ズドン！！ドガン！！ドドン！！  
ドガガン！！

鈍い金属音のような音を立てながら、二人は殴りあっている。

そんな二人の隙を見て球磨川が巖維人に長い螺子を投げてきた。

巖維人はめだかを蹴りで吹き飛ばし、螺子を避けた。

だがめだかは打ち所が悪く気絶した。

その隙に善吉と阿久根が攻撃を仕掛けてきた。

巖維人はそれに真っ向から向かい、二人を相手した。

善吉はサバット、阿久根は乱暴に金属バットを振るい巖維人に攻撃を仕掛けてきた。

巖維人は鉄塊を掛けて耐え、二人に蹴りを喰らわせた。

二人は跳ねるように飛んで行った。

そして善吉が立ち上がり異常を使った。

「これが俺の新たな力！！イービル・デビル恐れる悪魔！！」

善吉はそう叫び、スキルを使った。

すると善吉の体が人のモノでは無くなりつつあった。

頭からは禍々しい角が生え、

背中には悪魔を思わせる羽が生え

悪魔の象徴とも言える尻尾まで生え

さらに全体の皮膚が赤黒くなり、

歯には牙が生え、

西洋風の悪魔の姿になった。

「コレガイービル・デビル恐れる悪魔ノ能力、悪魔化ダ。

悪魔化ヲスレバ身体能力ガ数倍ニナルガ、ソノブン細胞ニダメー  
ジガ力カル。

サラニイービル・デビル恐れる悪魔ニハモウーッ能力ガアル。ソレハ・・・」

ボオ！！

善吉の脚に黒い炎が灯った。

「コレガ罪ノ業火ダ。」

ドゴン！！！！ガキイン！！！！

善吉が黒い炎を纏って蹴りつけてきたが、巖維人は鉄塊でそれを防ぐ。

「熱いねえ、お前は熱くないのか？」

「コレハ後カラ痛ミガクル、オラア！！！」

ガン！！ドン！！ギン！！！！ダダン！！ガアン！！ブオン！！ズガガン！！！！ゴガガガン！！！！

善吉が蹴りを連続でしかも確実に急所狙いでくる。

巖維人は鉄塊で受け続けるもそれも限界になってくる。

「くっ！！（このままじゃジリ貧だ。）こっちからも行くぞっ！！！！」

巖維人は善吉に殴りかかった。

だがその一撃はいつも簡単に避けられた。

巖維人は諦めず何度も殴りかかったがその全てが避けられた。そこで巖維人は善吉のある変化に気が付いた。

「おい何だよ。その眼は？」

「パラサイト・シーリング欲視力。才前ノ動キハ才見通シダ！！！」

「はっ！！そんなもんかよ。」

「カツ！！！！コレデ終ワリダ！！！！ディアブル・イフリート悪魔風脚炎魔人！！！！！！！！！！」

黒く大きい炎を纏った魔人を思わせる蹴りが、巖維人に向けて放た

れる。

「ならばこちらも！！嵐脚奥義！！断罪の大刀！！！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

黒く燃える魔人の蹴りと断罪の大刀を象った嵐脚が衝突し周囲には爆風が吹き荒れる。

爆風が止んだ時、立っていたのは巖維人。  
善吉は大きく吹き飛ばされ地面に倒れて恐れる悪魔の後遺症に悶えていた。

「なかなかの一撃だった<sup>ノーマル</sup>が、所詮普通だな。」

そして善吉に止めを刺そうとしたとき！

ガキイン！！！！！！

阿久根が金属バットで殴りつけてきた。

「こんな一撃で俺を止められると思うな。」

「それはどうか？」

「何だと？」

ブォォン！！！！

阿久根が持っていた金属バットに淡い光が灯る。

「何！！！」

「吹っ飛べ・・・破壊衝童！！！」  
シヴァ・ジュニア

ドゴオオオン！！！！！！

大気にヒビが入り、とてつもない衝撃波が巖維人を襲い、巖維人は吹っ飛ばされ校舎に激突した。

「グハアッ！！」

「この過負荷スキルは破壊衝童。シヴァ・ジュニア破壊の過負荷だ。」

ブオオン！！

そう言い、また金属バットに淡い光が灯る。

「全てを壊す一撃を受けてみな！！！！リアアアア！！！！！」

阿久根は破壊衝童を纏った金属バットで巖維人を殴りつけた。  
シヴァ・ジュニア

ドゴオオオン！！！！！！！！！！

しかしそこに巖維人は無く、代わりに校庭に大きなクレーターを作った。

「糞がつ！！何処に行った？！！！！！」

「コツチだよ、ボーケ！<sup>カミソリ</sup>剃刀落とし！！！」

阿久根が上を向いた時には遅く、巖維人の蹴りが直前まで迫って来ていた。

阿久根は避けるのが無理だと悟り、腕を交差し身を守ろうとした。

『おいおい』『僕のこと』『忘れてないかい？』

球磨川が急に飛び出し巖維人に向かって螺子を投げた。

巖維人は奇襲に驚いて硬直してしまい螺子に当たってしまった。

そしたら何故か剃刀落としが途中から維持できなくなりそこに阿久根の一撃が当たり吹っ飛んで行った。

「グフウ・・・球磨川お前いったい何を・・・・・・・・」

『僕は』<sup>オール・フィクションブック・メーカー</sup>『大嘘憑きと却本作りを使って』『君のスキルの一部を』  
『無かったこと』『にしたのさ』

「だが完全には使いこなせてないな。せいぜい封印程度だな。」

『ここだけでも』『抑えて置きたいのさ』『高貴ちゃんいくよ！！』

「分かりました球磨川さん！！」

阿久根はもうぼろぼろの傷だらけになっている金属バットを捨て、何処からか鉄パイプを二本取り出した。

<sup>シヴァ・ジュニア</sup>  
「破壊衝動」

ブオオオオオオン！！！！

淡い光が鉄パイプに灯った。

デュアル・ブレイク  
「貳つの破壊」

二つの鉄パイプが巖維人に襲かかる。

巖維人は剃で避けようとするが使えない。

巖維人は衝撃に身を備え・・・

ゴゴオオツオオツオオツオオオオン！！！！！！！！！！

天地を揺るがす衝撃が巖維人に向けて落とされた。

誰もがもう巖維人は力尽き倒れていると思った。

だがそこには金髪蒼眼の巖維人が居た。

「これを出させたこと後悔しろ」

ドゴオオンドゴゴオオオオン！！！！！！！！！！

球磨川と阿久根に巖維人の最大級の一撃が入った。

球磨川は瞬時に絶命し、生き返り吹っ飛ばされ気絶した。

阿久根は二つの鉄パイプで受け、絶命はしなかったが重傷を負い気絶した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

理性が半分飛んだ巖維人の咆哮が天を震わす。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

そしてようやく復活をした黒神めだかが乱神モードになり  
巖維人の咆哮に対するように雄たけびを上げる。

「くう　うう　うろ　おお　おお　おお　お　か　あ　ああ　ああ　み　い　い　い　い  
いい　いい　!!!!!!!!!!」

「.....」

オーバーフロー アブノーマル  
金色の臨界突破と完全な異常が激突する。

ガアン!!!!!!!!!!ガアン!!!!!!!!!!ズダン!!!!!!!!!!ズドオオン!!!!!!!!!!

先手を打ったのは黒神

巖維人の顔面に向かって右ストレートをブチ込んできた

それを左手を盾にして攻撃を受け逆に巖維人が右フックを黒神に打ち込む

黒神はそれをまともに受け意識が飛びそうになるのを耐え巖維人の腹にボディブローを打ち込む

巖維人はそれをわざと喰らい黒神の腕を掴み投げ飛ばそうとした  
しかし投げ飛ばされそうになつた黒神は右足の蹴りを巖維人に喰ら  
わせた

それは巖維人の脇腹に当たり巖維人は苦しそうな顔をして投げるの  
中止し黒神を地面に叩き付けた

地面に叩き付けられた黒神は咄嗟に受け身を取り衝撃を分散し致命傷にはならなかった

一方巖維人は善吉と戦つた時に着いた火傷と打撲、球磨川と阿久根と戦つた時に受けた肋骨のヒビと螺子のかすり傷さらに金剛猿人サイヤ・ボデイ以外封じられたスキル、そして黒神の蹴りでさらに容体が悪化した脇腹、巖維人は満身創痍だった。

「ガァ  
アァ  
アァ  
アァ  
アァ  
!!!!!!」

黒神は巖維人の問いかけに咆哮で返し、凄まじい速さで殴りかかった。巖維人はそれを真つ向から受け止め殴り返した。天地を揺るがす爆音が鳴り響き、衝撃で砂埃が大量に舞い黒神と巖維人を覆い尽くした。

85

津久見巖維人ただ一人だった。

そして巖維人はその場から消えた。  
箱舟中にはすでに退学届けが出してあった。  
誰も彼の行く先を知らない。

第一部 完

## 普通と特別と異常と過負荷と悪平等 V S 臨界突破 続（後書き）

### スキル説明

イービル・デビル  
恐れる悪魔

使うと外見が悪魔っぽくなる。

身体能力が何倍にもなり、悪魔的な力を手にする。

使用時間に比例し、反動で細胞に痛みが来る。

炎を使うと反動の痛みが増す。

安心院さん曰く、このスキルはダサいとのこと

シヴァ・ジュニア  
破壊衝動

破壊する過負荷。

安心院さん曰く、某海賊漫画の震動人間の能力、だそうです。

シンクロ・ファイリング  
共鳴同調

神が言っていた能力以外に完成したら使える能力がもう一つある  
それは共に戦った戦友と分かり合える能力

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3840x/>

---

六式を使う臨界突破

2011年11月15日15時38分発行